ない人が多く出た
馬車ひきをしていてケガをしてしまい営倉に入れられたこともあった
月一回くらい監査委員会の視察のある時は給食もよく、恵まれているように見せるための工作が行われていた
昭和二十四年八月四日　明優丸で舞鶴上陸　復員

職　歴

昭和十六年三月　岐阜県師範学校卒業
　土岐郡日吉第二小学校訓導
昭和十七年四月　満州奉天葵在満国民学校訓導
昭和十九年三月　撫順中学校教諭（応召）
昭和二十八年　恵那郡吉田村吉田中学校教諭
以後、公立小学校、中学校の教諭・教頭・校長を歴任、昭和五十七年三月退職

昨年、当市で行なわれた「語り継ぐ会」に出席させてもらい、このような運動が行われていることを初めて知った。これからは全抑協運動に全面的に協力する。

抑　留　記

岐阜県　山　村　勉

生年月日　大正十二（一九二三）年六月一日
本　籍　岐阜県恵那市大井町
軍　歴
昭和十九（一九四四）年一月十日
　応召　戦車第二師団防空隊（二〇九部隊）
　勃利
昭和二十年四月
　志願によらざる下士官候補生として軍学校へ
　西東安
同年七月
　独立戦車第九旅団戦車五二連隊　四平
抑留歴

一、原隊にて武装解除後、近くの軍人用官舎にて一カ月余合宿
二、昭和二十年十月十日　黒河よりアムール河渡河ブラゴエヘ
三、昭和二十年十一月中旬～同二十一年七月ごろまでレニノゴルスク収容所にて主として鉱山坑内夫としてトロッコ押しに従事する
四、昭和二十一年八月、セミパラチェンスク付近の収容所（所名不詳）にて野菜の収穫と漬け込み作業に従事
五、同年十月、収容所移動（所名不詳）れんが作り、土木工事など
六、昭和二十二年一月、収容所移動（所名不詳）、精錬所の場外作業などを主として行う
七、同年六月、またしても収容所移動（所名不詳）、全員作業に出たあと一人残り舎内の清掃を行う
八、同年七月中旬、帰国のため同地にて梯団編成出発
九、同年八月上旬、ナホトカより乗船帰国

職　歴

一、昭和十三年四月、明智町営電気部入所
二、昭和十八年四月、中部配電（現中部電力）
三、昭和二十三年八月復職（二十二年八月復員後、病気のため旧陸軍病院入院）
四、昭和五十三年五月、中部電力定年退職、永楽開発株式会社入社
五、昭和六十三年五月、同社退職、現在に至る

終戦後数日兵営内で過ごした後、武装解除が行われたが、小銃と帯剣のみで何の支障もなく行われた。その後兵営より軍官舎へ移住、一棟十数人単位で一カ月近く過ごした。その間ソ連軍の巡察があり、歩哨が来て時計、万年筆などねだった。原住民との接触はなかった。

九月下旬、四平を出て黒河で下車、ここで二～三日滞在、穀物の入ったかますを対岸ソ連領へ運ぶ船積み作業を行い、十月十日その船にて渡

河、ブラゴエシチェンスクにて貨車に乗り一カ月近い旅の門出となった（貨車には既に穀物のかますが二〜三段に積み込まれていた）。

車内は横たわる余裕はなく、リュックを背もたれに座っていた。一日一回ぐらい引込線に入り停車、同時に下車。用便を足し（大きな穴を掘り、板を渡した便所ができていた）、木の枝や板切れを集めて飯ごう炊飯を行ったり体操をやったりして退屈をしのいだが、高齢者などで士気を失った者など行動が鈍り、シラミが発生した。

バイカル湖畔を過ぎ西行すること数日、本線より南下、カザフスタンに入りセミパラチェンスクと思われる駅にて下車、最初の収容所へ入った。この収容所は前進基地的な役割を持つ収容所と思われ、木造バラックながらスチームが入っていた。二〜三日滞在中に私物検査があり、雑のう一杯ぐらいの日用品、毛布一枚が残され、刃物、筆記具などすべて没収された。

ここで初めて黒パンの給食が出されたが、酸っぱくて口に入らなかった。しかし、これが後日、馬糞までパンと錯覚するような事態になるとは夢にも思わなかった。また、南京虫の執拗な攻撃に遭った。収容所の岸で外輪船に乗りイルテイン川（？）を遡上し、途中下船。トラックにて樹木一本ない山岳地帯の一本道を登り、夜レニノゴルスク収容所に入り労働の第一歩に入った。

帰国はE収容所で通達され、この地にて梯団編成、昭和二十二年七月中旬乗車、シベリア本線に入り八月初めナホトカに到着する。

途中の食事は雑穀のお粥が主であったが、今までのことを思うとありがたいことであった。ナホトカでは民主化されたように装っていて大した出来事もなく乗船できた（四〜五日滞在）。初めて帰国の実感湧く。

八月十二日（？）舞鶴上陸、復員業務を終了。痔疾の手術のため岐阜の旧陸軍病院へ入院するも機器故障中のため国立大井療養所へ転院。ここで手術を受け、翌二十三年五月、中部配電に復職。

軍隊抑留中は現職扱いとなっていたため、給料、昇給も同じように行われたので、生活面では支障はなかったが、抑留中の精神的打撃は大きく、実際に経験した以上の重圧にあえいでいる夢をよく見た。

抑留記

岐阜県　小澤徳祐

生年月日　大正六（一九一七）年一月二十五日
本　籍　岐阜県恵那市大井町
軍　歴
昭和十三（一九三八）年三月二十五日
満州国牡丹江海浪　航空教育隊第一期生に入隊
〃　十四年十月
関東憲兵教習所に転属
〃　十五年三月二十五日　右教習所修了
〃　十五年四月一日
関東憲兵隊司令部八六部隊第四班に配属
〃　十五年六月一日　憲兵伍長に任官
〃　十七年四月一日　憲兵軍曹に昇進
〃　十九年八月一日　憲兵曹長に昇進
〃　二十年八月十日
奉天（瀋陽）に集結のため列車輸送中に終戦
〃　二十年八月十五日
終戦のため奉天農業大学に集結、武装解除と同時にソ連指揮下に入る

抑留歴
昭和二十年九月十日
黒河経由入ソ、ハバロフスクに集結
〃　二十年九月十二日
貨車輸送にて約四十五日間を経てタシケント
アングレン（囚人の街）に到着
直ちに半地下幕舎生活が始まる
昭和二十年十月十日
六人一組三交代制、二十人の班にて採炭訓練